

入門期の中国語教育における発音習得の三つの要点 ： 声調・韻母・声母について

野田，雄史
佐賀大学非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/20562>

出版情報：中国文学論集．40， pp.23-33， 2011-12-25．九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



入門期の中国語教育における 発音習得の三つの要点

— 声調・韻母・声母について —

野 田 雄 史

はじめに

筆者は先に、「中国語の音節構造の指導法について」（中国文学論集38 2009）において、入門期中国語教育の発音指導の際に音節構造を詳細に分析して提示すべきであることを論じた。

さて、音節構造の詳細な分析、と聞くと、その発音の再現においても高度な正確さを要求すると思われるかもしれない。確かに、発音再現能力は聴解力を身に付ける基礎となるばかりでなく、単語を暗記する際においても異なる単語を弁別するための手がかりとなるので、ある程度の正確さが求められる。問題は、その「ある程度」とは一体「どの程度」なのか、ということである。

本論ではこの点について、既存の教科書⁽¹⁾が求めている現状を調査した上で、検討していきたい。以下、声調・韻母・声母の順に検討していく。

一 声調学習に必要な正確性とは

中国語の声調は、五度法により、一声 [5 5]、二声 [3 5]、三声 [2 1 4]、四声 [5 1] と説明される。実際に既存の教科書ではどのようにこれを教えているか、以下に見てみる。

声調の音程変化の説明

三音階 甲 丙 己

五音階 乙 戊 庚 辛

説明なし 丁

説明のない丁本一種を除き、音階を五段階または三段階で示している。

五音階は、先に言及した五度法で使われる調値をそのままなぞった直・曲線を図示する。（三声の [1 4] 部分を破線に表現するものや省略するものあり）

三音階は五度法を簡略化したもので、五度法の調値 5・3・1 をそれぞれ

入門期の中国語教育における発音習得の三つの要点

高・中・低に対応させ、一声 [高高]、二声 [中高]、三声 [低低]、四声 [高低] とするが、図示された直・曲線は三声を除き五音階のそれとほぼ相似である。(三声についても [2 1] 部分を気分的に表現するものもある)

確かに中国語の声調は五度法で記述するのが正確である。だが、そのことと中国語の声調を五度法を使って教えなければならないことは等価ではない。というのも、声調の学習は殆どの教科書で冒頭に行なわれるが、初学者が中国語の最初の体験としてこの五度法を知った場合、中国語の音程に対する認識が過剰になるからである。「私は音痴だから中国語が習得できない」という感想を聞くことが時々あるが、この感想はまさしく、音程に対する過剰認識から来るものであろう。また、「私は音痴ではない」と思っている学生にとっても、過剰認識は決してよい効果をもたらさない。それは、忠実に五度法の音程をなぞろうとした結果、かえって誤った音程変化を習得してしまう可能性があるからである。それはどういうことか。

そもそもネイティブは中国語の声調には五つの音程があると意識して声調を操っているだろうか？ 答えは否である。一般の中国人は、中国語に存在する音程は二つだと認識しているはずである。では、四声の音程が一声 [5 5]、二声 [1 5]、三声 [1 1]、四声 [5 1] とならないのは何故か？ それは単に、「低い音程は出しにくく維持しにくい」からである。

つまり、二声は [1 5] という音程変化を念頭において発音しているのだが、低い音程の発音のしづらさから、開始の音程が [3] に「浮き上がって」いるのである。また、三声は [1 1] という音程変化を念頭において発音しているのだが、低い音程の発音のしづらさから、いきなり [1] に到達できずに手前の [2] から探りを入れながら下げていった結果 [2 1] となり、折角到達した [1] の音程もそれを維持するのがつらいことから最後には低さを保てずに浮き上がって [1 4] となり、結果として [2 1 4] という音程変化になるのである。

これを要するに、四声の音程はネイティブの観念上は一声 [高高] (= [5 5])、二声 [低高] (= [1 5])、三声 [低低] (= [1 1])、四声 [高低] (= [5 1]) となっており、実際上は一声 [5 5]、二声 [3 5]、三声 [2 1 4]、四声 [5 1] となっている。では、外国人学習者は観念と実態とどちらを模倣すべきであろうか？ 現実に存在する実態を模倣すべきだと思いかもかもしれないが、実は観念を模倣した方が、より正確に実態をなぞる結果となる。それは何故か。

先に、ネイティブは低い音の出しにくさ故に二声で [1] を出すつもりでも [3] になってしまう、と述べた。この「低い音を出そうとして出せずに

音が浮き上がってしまう」という現象は、当然学習者にも発生する。ということは、学習者が〔3 5〕と発音しようとしたらどうなるか？ 更に浮き上がって〔4 5〕となってしまう。そうすると、一声〔5 5〕との区別が極めて曖昧になってしまう。

また、三声ではもっと深刻な問題が生じる。それは、学習者が〔2 1 4〕という複雑な音程変化を目にして戸惑うところから始まる。他の三つの声調は、単純で直線的な変化であるのに、三声のみが複雑で曲線的であるため、身構えてしまう。三声の音程変化を複雑にしている一番の要因である末尾の〔1 4〕は、そもそも現実には余り出現しない部分でもあるので、いっそ触れない方がよい。

では、〔2 1〕と教えればよいのか？ ここにもまた、「浮き上がってしまう」現象が発生する。先に述べたように、いきなり低い音を出すのが難しいため、少し高めの音から探りを入れていった結果の〔2 1〕なのであり、観念としては〔1 1〕なのである。これを、〔2 1〕を出そうとして発音すると、「一番低い音よりも高い音から入る」という方に注意が行き、どうしても〔3 1〕や、場合によっては〔4 1〕というような音程変化になってしまう。そうすると、四声〔5 1〕との区別が極めて曖昧になってしまう。

従って、学習者としては、二声〔低高〕、三声〔低低〕とのみ考えて発音練習をすればよいのであり、そのように訓練した結果、概ね二声〔3 5〕、三声〔2 1〕くらいの音程変化が実現するのである。一声と四声もこれに倣って一声〔高高〕、四声〔高低〕とすればよい。そうすれば、一声〔高高〕、二声〔低高〕、三声〔低低〕、四声〔高低〕という単純な構造となる。単純な構造は覚えやすいため、更に学習効果が高まることになる。

中には極めて忠実に音高再現をしようとした結果、二声〔1 5〕、三声〔1 1〕という音程変化を実現してしまう学生もいるかもしれない。そうすると現実の音程変化と乖離してしまうことにはなる。ただ、このことは声調識別に対して何らのマイナス要素ともならないので、全くデメリットは生じない。（それに、そこまで忠実に再現できる程に音感の優れた学生であるならば、自分で現実の音程変化に合わせて修正することも可能であろう。従って、「乖離」ということ自体が全くの杞憂である。）

中国語の声調に「高低」二種類の音程変化しかないとなれば、日本人の学習者にとって大きなメリットが生じる。それは「同じ声調言語を母語に持つ日本人にとって、声調学習は難しくない。」と気付けることである。一般の日本人には、「中国語は声調があるから難しい」という感覚が根強くある。そして、どうかすると中国語の教科書にもそう書いてあったりする。とんでもな

入門期の中国語教育における発音習得の三つの要点

い話である。母語として「飴」と「雨」を耳で識別できる以上、「麻」と「罵」も容易に耳で識別できるし、また発音もできるのである。中国語の学習において、難しいものは難しいとはっきり教えなければならないが、簡単なものまで難しいと身構えさせる必要はないのである。

但し、声調学習において難しいものもある。それは二音節をセットにした音程変化である。声調の組み合わせによっては、たとえば「二声+三声」は日本語の「福岡」、「四声+三声」は日本語の「九州」の音程変化と同じであり、さほど難しくはない。しかし、「四声+二声」のような音程変化は日本語では現われないため、なかなか習得しづらい。従って、声調練習の仕上げには二音節セットの練習が欠かせない。諸本ではどうなっているか見てみよう。

二音節セットの声調練習

無	乙	丁	戊	己	庚
一部有	甲				
有	丙	辛			

練習が存在するのは3本。それぞれ様子が異なっている。

甲本は練習として二音節練習を十例挙げておきながら、その実取り上げたセットは七種類のみである。「三声+一声」はどういうわけか三例も挙げている。同じ声調の組を「m a m a」「y i y i」「l i l i」と、三度も繰り返し提示する必要はない。二音節セットの組は軽声を除いても十六種類、「二声+三声」と「三声+三声」を同一視したとしても十五種類あり、全てしらみつぶしに練習するのが望ましい。

丙本は十六種類全ての例を挙げている。中国の都市名で揃えている点も、学生の興味を引くという点で工夫がある。但し、都市名に限ってしまったがために無理をしているところもある。それは、現実の地名はいろんな声調に満遍なく出現しはしない、ということだ。合肥・營口・自貢等は殆どの学生が知らない地名であると思われる。

特筆すべきは辛本で、最も優れているのは、軽声まで含めた二十種類の二音節セットを全て「m a m a」で練習させている点である。現実の単語で練習させるのも大事だが、それだと声母や韻母に注意が向いてしまって声調への注意が疎かになりかねない。純粹に声調だけを練習するには、一番簡単な「声母+韻母」である「m a」で練習するのが最適である。

また、辛本は現実の単語からも二十種類のセットを抜き出している。単一の事項の練習に二種類のパターンを用意するというのは、かなりページ数を割かねばできないことであり、二音節セットの練習を重視している証拠であ

ろう。二十の単語は、軽声で終わるものは全て親族呼称であり、わかりやすくてよい。それ以外の十六種は、奇しくも丙本と同じく地名から選んでいる。ただ、丙本と違って「都市名」という縛りをつけなかったため、省名や国名からも選ぶことができて採録対象が増えた結果、それぞれの地名の知名度は向上しているものと見受ける。(たとえば先に触れた合肥・營口・自貢は、雲南・河北・印度になっている。)

二 韻母の教え方

中国語の韻母は三十種類以上あり、全てを習得するのはそれなりに困難である。だが、概ね基本六母音の組み合わせであり、まずはその六つの母音をどう教えるか、が大事な一步となる。六つの母音を一度に覚えるのは負担に感じよう。その負担を軽減するためには、六つの母音を同じように学ぶのではなく、緩急をつけることが必要である。その鍵となる四つの母音、「a」「i」「o」「u」をどう教えているか、諸本を見てみよう。

	a	i	o	u
甲	大きくア	引いてイ	丸めてオ	小さく丸めてウ
乙	口の形を図示・舌の位置による逆台形への配置・国際音標			
丙	大きくア	引いてイ	丸めてオ	丸めて突き出しウ
丁	大きくア	引いてイ	丸めてオ	丸く突き出してウ
戊	特に説明なし			
己	大きくア	子供の「イー」	丸めてオ	突き出して奥からウ
庚	大きくア	左右に引く	丸めてオ	丸めて突き出す
辛	大きくア	子供の「イー」	丸めてオ	丸く突き出してウ

表では一律に「大きくア」「引いてイ」「丸めてオ」のように表記したが、細かな表現は各教科書で異なっている。ただ、これらに共通するのは、「口を大きく開けて」や「口を横に引いて」や「口を丸めて」という指示は、日本語の「ア」「イ」「オ」を発音するのに比べて、という意図である。筆者が指摘したいのはここである。殆どの教科書で、中国語の「a」「i」「o」は日本語の「ア」「イ」「オ」と異なる音だ、と表現しているのである。では、中国語の「a」「i」「o」と日本語の「ア」「イ」「オ」は本当に異なる音なのだろうか？

少なくとも国際音標上は両者は同じである。乙本その他、甲本・丁本でも国際音標が併記してあるが、甲本・丁本では、言葉による説明では中国語の「a」「i」「o」と日本語の「ア」「イ」「オ」は違うような説明をしておきながら、実際に表示した国際音標では同じ記号を書く（日本語の母音の国際音

標を示しているわけではないが) という矛盾を冒しているのである。

もちろん、国際音標は万能の標音法ではない。そこで示されるのはあくまで実際の発音の近似値であって、細かな部分については再現できないこともある。だが、仮に両者にそのような細かな違いがあったとして、国際音標で区別できないような違いを殊更に強調して区別する必要があるのだろうか？

恐らくそれぞれの教科書が言いたかったのはそういうことではない。要は、「発音練習は口をはっきり動かしましょう」と言いたかったのだろう。これは発音練習の要諦であって、つまりは日本語の母音の発音練習の際にだって、「アは口を大きく開けましょう」と言うに相違ないのである（少なくとも声楽や演劇等の、母語としての発音練習の際にはそれが要求される）。従ってこのことは、個別の母音の発音の仕方とは切り離して、発音練習の冒頭に「発音練習は口をはっきり動かしましょう」と宣言しておけばいいのであり、そうしておきさえすれば、中国語の「a」「i」「o」と日本語の「ア」「イ」「オ」を殊更に違うものとして扱うことなく、「同じ音だから簡単だ」と済ませて学習負担を軽減することが可能になるのである。

「a」「i」「o」は日本語と同じ音、としてしまうことで、「u」の音が特殊な音であることが際立つ効果もある。現状の諸本のように、「a」「i」「o」「u」を一律に「日本語より～」と説明すると⁽²⁾、どれも日本語の「ア」「イ」「オ」「ウ」とちょっと似てちょっと違う音なのか、と早合点してしまいかねない。そして実際に「a」「i」「o」の中国語の発音を聞いた時に、日本語の「ア」「イ」「オ」とそっくりであることを発見し、そうであるならば「u」もやはり日本語の「ウ」と同じなのか、と思い込んでしまう危険がある。勿論、実際に中国語の「u」の発音を聞いた時に、それが日本語の「ウ」と全く異なる発音である⁽³⁾と聞き分けられる程成熟した耳を持っていることは期待できない（期待すべきではない）。ここで誤解してしまうと、後で出てくる「z i」「c i」「s i」と「z u」「c u」「s u」の違いは全くお手上げになってしまうので、是非とも避けなければならない。それを避ける唯一の手段が、「a」「i」「o」は日本語と同じ音、「u」は、もしかしたら日本人の耳には日本語の「ウ」と同じ音に聞こえるかもしれないが実は全く違う音、と明確に区別して説明することである。

この「u」の発音の問題と関連して、教えるのに注意が必要になってくるのが「o」の発音である。「o」は既に述べたように、日本語の「オ」の音とほぼ同じ音であり発音を再現するのは容易である。だが、日本人が中国語の発音を学ぶ際には、「o」と「u」の識別の問題が発生する。言うまでもなく「o」と「u」はともに円唇で、「o」が大きな円唇、「u」が小さな円唇であ

る。従って日本語の「オ」も本来大きな円唇なのであるが、日本語の母音の中にはそれと対をなす「小さな円唇」が存在しない（「ウ」は平唇）ので、この円唇の大小ということに余り注意を払っていないのである。このことにより、日本人にとっては中国語の「o」と「u」をきちんと区別するのは難しく、更には「o」と「ou」とをはっきり区別するのも難しいのであるが、明確に指摘しない限りこれらの難しさに気付きにくい。「u」の発音を教える際に、合わせて言及しなければならない点である。

なお、「o」の説明で六種にあった「オ」を「丸める」という表現は「o」と「u」の円唇の大小による区別という観点からはマイナスである。「丸める」と聞くと、ついつい口をすぼめがちになるが、それはせっかくの大きな「オ」を小さくして「u」に近付けることになるからである。

ところで、甲本は母音単独だけではなく、声韻結合にも積極的に国際音標を付している。このことの当否について、少し検討しておきたい。

教授用資料によると、国際音標を付しているのは「テキストの見た目の単調さを補う目的」としている。しかし、それはそのような目的を達するだろうか？

国際音標を見た学生は、当然それがピンイン綴りの発音を表示していると理解するだろう。発音記号そのものは英語の学習で見慣れているからである。その上で彼らはどのような反応を示すだろうか。英語の発音学習の難しさを思い出して即座に拒絶する学生もいるだろうが、概ね、留意するか等閑視するかの二つに分かれるのではないか。

等閑視する者にとっては、それでも単語を見るたびに目に飛び込んでくるそれらの「模様」を、「鬱陶しい」と感じるかもしれない。一方で、留意する学生はどう感じるか。恐らく、英語の発音学習と同じように、この記号に従って発音練習をしなければならないと身構えることであろう。いずれにしても、「見た目が単調にならない」というような効果は起きないのである。

更には、この発音学習に利用しようと身構える「熱心な」学生に困ったデメリットが生じる。それは、丹念にそれらの記号を見比べているうちに「an」と「ang」における「a」の音価の違いに気付いてしまうことである。

もちろん、「an」と「ang」では「a」の音価は異なる。それを違えて発音すること自体は特に問題はない。問題は、「n」と「ng」の区別すらまだよく発音し分けられない段階で、「an」と「ang」の「a」を違えて発音するような更に高度な発音の鍛錬にまで踏み込んでしまうことがもたらす過負荷である。「en」と「eng」の「e」は、違う音であることを明確に認識しそれを再現すべく努力しなければならないが、「an」と「ang」の

入門期の中国語教育における発音習得の三つの要点

「a」をともに同じ音で発音したところで深刻な問題は起きないのであり、初学の段階で追求すべき正確性のうちには入らないと考える。

従って、個別の子音・母音の音価を説明する補助材料として国際音標を使うのは手段としてありうるが、全ての音節にそれを表記する必要はないと考える。そもそも、発音記号による発音学習が必要な英語とは異なり、ピンインはそれ自体が発音記号なのだから、しっかりピンインを学べばよいのである。

三 声母習得における注意点

声母を学習する際には「調音点」と「調音方法」による分析が欠かせない。これについて諸本はどのように触れているかを見てみよう。

調音点 調音方法

甲	有	無気音・有気音・鼻音・摩擦音・流音（l r）
乙	有	無
丙	有	無気音・有気音・鼻音・摩擦音・側面音（l）
丁	ともに	詳細な言及があるが縦横の表になっておらず見づらい
戊	有	無
己	有	無
庚	ともに	詳細な言及があるが縦横の表になっておらず見づらい
辛	有	無気音・有気音・鼻音・摩擦音・有声音（l r）

調音方法について、無気音・有気音の差違のみに触れているものは「無」とした。これでは発音習得にはいささか不親切であり、やはり調音点・調音方法の二つの要素を使って表で示すのが、体系の把握に便利である。

丁・庚両本は、調音点・調音方法の説明はむしろ他本よりも詳しいくらい詳細にしてあるのだが、それがために表になっていない点が残念である。詳細な説明+表、くらしいのスペースは割いてよいと思う。

「r」を摩擦音に入れるもの（丙本）と、入れないもの（甲・辛本）との二種類の見解がある。甲・辛本の分類は、「r」の実際の発音が摩擦音になっていない場合があることを踏まえての分類と思われるが、本来的には「r」は摩擦音である上、発音の習得も摩擦音の方が容易であるので、摩擦音と教える方が優れている。

なお、辛本は「l」「r」の分類を有声音としているが、有聲か無聲かで言うとな鼻音も有声音であり、紛らわしい。一般的には耳慣れない語彙であっても、甲本の流音か、丙本の側面音という、伝統的な呼び名を使うべきであろう。

次に実際の発音方法について。日本人が中国語の声母を発音する上で注意が必要な点を拙著では四種類にまとめている⁽⁴⁾。その四つとは、

1. 無気音と有気音の区別
2. 舌根摩擦音の音価
3. 舌面音・舌歯音の発音
4. そり舌音の調音点

である。このうち、教科書として配慮が必要だと考えるのが、「無気音と有気音の区別」と「舌面音・舌歯音の発音」の教え方である。これらをどう教えているか、諸本を見てみよう。

まずは、「無気音と有気音の区別」について、これは、それぞれの発音方法を詳しく教えるのみならず、日本語の子音との関係にも触れた方が、より理解がしやすいはずである。だが、八種の教科書を見る限り、日本語の子音の中にある無気音と有気音の違いについて触れているものはなかった。韻尾「n」と「ng」の違いについては、多くの教科書が「案内の“ん”」「案外の“ん”」と、日本語を例に出して説明している。これは理解しやすく再現に有利なよい工夫であるが、同じ工夫を、日本語における無気音と有気音の出現の仕方でも説明すべきであろう。これは実際には教室で教える教師の裁量によって示されることになるだろうが、教科書にある程度の指針があった方が教えやすく学びやすいのは確かなことである。なお、丙本は全ての声母の音の説明に片仮名表記を付していた。論外である。

次に「舌面音・舌歯音の発音」について。これには注意すべき点が二つある。一つは、音は韻母「i」まで含めて日本語の「チ」「シ」「ツ」「ス」と同じであること。もう一つは、ピンイン綴りから類推してしまう音と、実際の音とがかけ離れていることである。この二点について諸本を見てみると、どれ一つとして言及していない。しかし、この二点への言及はどうしても必要である。

一つ目の、日本語と同じ音であることを言うのは、学習者の心理的負担を減らすという積極的な利点がある。

二つ目の綴りの問題は、ピンイン綴りを見た際ついつい日本語ローマ字やアルファベットの発音を援用してしまいがちで、意識していてもなかなか克服困難なところである。しかも一旦習得してしまった間違いはなかなか後から矯正にくい。従って、初期のピンイン学習において、余程このことを意識して学習しなければ、いつまで経っても「qu」を「くー」、「cong」を「こん」と発音して平然としているし、「zi」に「ツイ」という仮名を宛ててその間違いに全く気付かないでいることになる。このような「嘘読み」

は、有気・無気の区別が付かないような素朴な未熟さとは全くレベルの違う問題点で、意思を伝える上で大きな障碍となるため、初期の段階で必ず排除しておかなければならない。

おわりに

発音の習得とは、耳で聞いた音を口で再現することではない。耳で覚えようとしたのでは、「n」と「ng」の違いやそり舌音を習得することはできないし、「si」と「su」の区別は永遠に付かないであろう。

一方、口の開け方や舌の動かし方の原理を説明すれば、それに従って近似の音を再現することは可能である。そして、ある音と、似た別の音との差違について知り、その点に注意して発音すれば、「ネイティブそっくりの美しい発音」ではなくても、意思の疎通を阻害しない、誤解のない発音となることができる。

具体的には、たとえば「b」と「p」、「o」と「u」をそれぞれ異なるように発音できればいいのであり、「an」と「ang」の「a」を区別することは必要ではない。

言い換えれば、ピンイン表記で異なる文字で表わされる場合のみ区別すればよいのである。(但し、「ian」の「a」や「en」の「e」等を除く。)

何故ならば、ネイティブが意識的に区別するのはピンインで違う文字で表わされている場合に限られるのであり、いくら「an」と「ang」の「a」を区別して発音したところで、ネイティブの耳には同じ「a」としか受け取られないからである。逆にどちらも同じ日本語の「ア」で発音したところで何一つ問題は発生しない。これは、日本語の「案内」「案外」「案配」の「ん」を日本人が聞き分けられないことと、それらを全て「n」で発音したところで何一つ問題は発生しないことを参考にすればすぐにわかることと思う。これが冒頭で言った「ある程度の正確さ」である。

最終的な到達目標として、ネイティブそっくりの美しい発音を目指すのは結構なことである。だが、初学の段階でそれを目指してしまうのは、多くの場合過剰な負担となる危険性があり、その結果もっと大事なことが疎かになりかねないので、むしろ封印しておくべきである。

注

- (1) 前稿と同じく八種の教科書を比較材料として使用した。以下、それぞれ甲～辛の代号で例示する。

- 甲 朝日出版社『ドリル付着実に学ぶ中国語入門篇』讃井唯允・朱継征
2003年
- 乙 朝日出版社『ストラクチャー構造から学ぶ入門中国語』阪口直樹・小池
一郎・名和又介・楠原俊代・沈力・銭鳴・榎本泰子 2002年
- 丙 好文出版『文法をとおして学ぶ中国語 Plus』依藤醇・石田友美・桑野弘
美・島田亜実・森山美紀子 2006年
- 丁 三修社『新中国一星期 中国語初級テキスト』羅奇祥 2001年
- 戊 中国書店『実力中国語』岩佐昌璋・苟春生・日下翠・西山猛 2000年
- 己 白水社『1冊めの中国語 講読クラス』劉穎・喜多山幸子・松田かの子
2008年
- 庚 白帝社『現代中国語入門』彭国躍・松村文芳・徐峰・加藤宏紀 2005年
- 辛 朝日出版社『おさらい CD-ROM 版ぼくのせんせい 問答有用 対話で学ぶ
中国語』相原茂・郭雲輝 2009年

筆者はこのうち、甲～庚本の七種を教室で実際に使ったことがある。辛本については使った経験がないが、前稿において、所謂「アクハシ」法に言及する必要から取り上げたものであり、引き続き本稿でも検討対象とする。

- (2) なお、辛本では発音の難所を再点検するページを設けているが、そこでは「u」のみ「日本語の「ウ」ではない」と明言している。
- (3) 実際には、日本語の「ウ」の音価は結合する子音の影響で数種類あり、その中には中国語の「u」の音価と似たものもあるが、ここでは考察の対象としない。
- (4) 野田雄史『初級中国語』筑豊日中文化企画2010年 ISBN978-4-9905068-0-3